

総長選考委員からの3つの個別質問

質問1

学生の学びで重要なものは何か？

回答

施設や学生の自由な発想を成長させる仕組みは他の候補者が指摘した通りで、全く異存はありません。

加えて、2点を追加します。

一点は、現在、学生総合相談センターや保健センターからの報告を聞くと、毎年、メンタルな問題を持つ学生が増加しており、全体の10%以上が何等かの問題を抱えていると言われています。加えて、留学生や障がいを持つ学生では、その比率は更に高くなります。大学として、HU VISION 2030で持続可能な Wellbeing を掲げている大学で、その構成員の主役である学生の Wellbeing は最も大切にされるべきであることは論を待ちません。その意味で、大学として、今後、学生総合相談センターや保健センターの強化を考えるべきです。Accessibility、バリアフリーの整備も重要で、施設整備の上で、高い priority をこの整備に置くべきだと思います。

二点目は、A I の登場によって、大学の在り方が大きく変わる、しかも、この数年で大きく変わることを想定する必要があると思っています。たとえば、最近できた ZEN 大学などは、これまでの大学像を大きく変える可能性もあります。その中で、学生の学びも大きく変わると考えるべきです。言い換えると、教員の側も学びの在り方も含めて、先制的に大学も変わらなければならないと思います。いわゆる Third Place と言われる場として、大学を再構成する必要があると考えています。

質問2

教職員の多様性を目指すためには、特に、グローバルな競争下で、教員の確において、給与の問題は重要だと思います。多様性の確保について、どのように考えるか、答えてほしい。

回答

給与の問題は、現在の政府の高等教育の政策下では、改善は難しいと考えられます。その点、やはり、国際卓越研究大学の採択が大きな解決の切り札だと思います。その意味で北大として、間違いなく、国際卓越研究大学は、給与面の強化においても、目指すべき目標です。

しかし、先ほどから申し上げているように、現在の政治状況を見ると、高等教育の方針が、大きく変わる潮目の時期にさしかかっていると思います。少なくとも、競争的な環境

は変わりませんが、大学への支援が拡充する可能性があり、そのチャンスを生かすために、学長は、霞が関で、最大限の努力をすべきと思います。

また、教員の多様性については、現在、米国の科学界の状況を見ても、日本に卓越した多様な研究者を集めるチャンスが高まっています。この点、北大は、この補助金（EXPERT-J, GP-One など）に積極的に応募して、採択を受けていますので、こうした活動をさらに強化したいと思います。

DEI、多様性は、あらゆる組織の「成長」と「生存」にとって、もっとも重要な戦略です。また、DEI、多様性は、積極的な対策を継続的に進めて行かなければ、必ず、後退するものだという事も学んできました。十分な配慮を少しでも怠れば、目に見えない微細な差別やハラスメント（マイクロアグレッション、Microaggression）が組織に蔓延し、その体力を奪うことは十分に注意が必要です。特に、外国人教員、女性教員は、その対象になりやすいことに関して、学長は高い感度を持つべきです。

質問3

少子化の中で、大学の教育をどう改革し、発信力を高めるか？

回答

ご存じのように、2040 年に向けて、18 歳人口は、70%程度に低下することは、間違いなく起こります。その中で、私立大学だけでなく、国立大学法人においても、2030 年くらいをめどに 5 % くらいの定員削減があってもおかしくないと思います。

その中で、北大が考えるべきことは、たくさんありますが、全体像は、「攻めの人材確獲得・北大」でしめました。また、重要なことは、中教審が指摘している、出口の質保証を強力に進めることかと思います。これまで、入学時の厳しい質保証に注力してきましたが、北大での学びが、まさに、北大の 4 つの建学の精神が生かされる形で、全人教育にシフトし、出口の質において、他の大学とどのように差別化するかと考えるべきです。いくつか方策はありますが、大学院における学環制度（大学院の連携・統合）や新渡戸カレッジのような優れた教育制度をさらにブラッシュアップすることも出口の質保証に繋がると思います。

また、資料の 13 ページで説明したように、少子化の中で、意欲ある人材が北大を目指してくれるようにするために、「攻めの人材確獲得・北大」を進めたいと思います。説明は重なりますので、避けますが、先ほど申し上げたように、留学生については、すでに ISP の経験（倍率が 10 倍前後と極めて高く、意欲の高い学生が集まる）で、極めて優秀な学生が集まることはわかっています。今後、英語による発信を強化し、そのターゲットもアジア・太平洋・インド地区にフォーカルする地域的集中と選択も考えたい。また、資料の 13 ページで記載したように、アジアでの受験が可能になるように考えたいと思っています。

す。また、留学生の日本での活躍が重要であり、京都大学がその方針を示したように、留学生に対する日本語教育はこれまでにない重要性を持っています。北大における日本語教育は十分ではない（教員の数も少なく、多くが非正規雇用）ことは承知しており、今後、北大においても日本語教育の充実を目指します。そして、このことを様々なチャンネルで強く海外に発信して参ります。

また、すでに、確立している海外ネットワーク（同窓生の会、あるいは、主要な研究連携機関）をさらに活用した海外への発信を強化いたします。